ちよだボランティアマガジン［ジョイアス］

Join+us

TAKE FREE

2016 特別版

interview

フォトジャーナリスト 安田 菜津紀さん

発行／社会福祉法人千代田区社会福祉協議会・ちよだボランティアセンター
〒102-0074 千代田区九段南1-6-10 かがやきプラザ4階 開室日・時間／月～金曜日 8:30～19:00／土曜日8:30～17:00（※日曜・祝日はお休み）
TEL／03-6265-6522 FAX／03-3265-1902 URL／http://www.chiyoda-vc.com E-mail／volunteer@chiyoda-cosw.or.jp ☆Facebook、Twitterもやってます！「ちよだボランティアセンター」で検索！

ちよだボランティアセンターってどんなところ？

ちよだボランティアセンターに潜入♪

ボランティア打合せスペース！

ちよだボランティアセンターでは、ボランティア活動やグループ運営等の相談、ボランティア保険・行事保険の手続きなどが行えます。

イベントも実施されています。

ボランティアが見つかるよ！

ちよだ災害ボランティアセンターでもしもの備えを

ちよだボランティアセンターは、大規模な災害がおこった際、「ちよだ災害ボランティアセンター」を開設し、被災された方々を支援するため、ボランティアのコーディネートを行います。

ちよだモデルネットワーク（CMN）が災害時のための学習会を実施。

避難所防災訓練に学生ボランティアも定期的に参加。

まもりたいぞうを製作・販売して、区内に避難している方々の支援に活用。

ちよだボランティアセンター 開室時間：平日 8:30～19:00まで 土曜 8:30～17:00まで

MORE! ちよだボランティア情報！ ～全て無料！～

○ホームページ

ちよだボラセン で検索！

○情報マガジン
「ボランティア」
（毎月25日発行）

○メールマガジン
「千代田でつなメール」
（毎週火曜配信）
登録・解除用アドレス
http://www.chiyoda-vc.com/9036

○Facebook,Twitter もやってます！
ちよだボランティアセンター で検索！

学生の可能性は無限大、自分が思っている以上に信じても良いのではないか。

カンボジアで貧困にさらされる子どもたち、日本国内の被災地の取材を行うフォトジャーナリスト・安田菜津紀さんにインタビュー。ご自身のボランティアや学生時代だからこそ出来る可能性についても話を聞いてきました。

すべての始まりは高校時代のボランティア活動からでした

16歳のときに、NPO法人（国境なき子どもたち）の活動に「友情のレポーター」として参加し、カンボジアで過酷な環境にいながらも強く生きている子どもたちを取材しました。「まず身近にいる大切な人を守れる人になっていきたいな」と、人として生きる上で大切なことを10日間の中で学びました。知ってしまった以上、何かしたいという気持ちが芽生えてきました。唯一、何か自分にできることは、五感で感じてきたものを、少しでも多くの人たちと共有をしていくこと、それをシェアしていくことが、伝えるというフォトジャーナリストという仕事に、行きついたきっかけです。

東日本大震災で活動を始めた理由

主にカンボジアを中心に取材を行っている中で、2011年3月11日に東日本大震災が発生しました。当時、陸前高田市に義理の父母が暮らしており、義理の母が津波で流されて亡くなりました。義母は手話の通訳として活動していました。地震が起き、大きな揺れがあった時に、耳の聞こえない人たち、不自由な人たちは警報に気付いてないかもしれないと、真っ先にそういう人たちのところに走る人でした。最期まで誰かのために生きた命が、この町にあるのであれば、この町の中で義母の想いをつないでいきたいと陸前高田に通い始めました。

長年追い続けているHIVに感染した少年。元気に飛び回る様子に、訪れる度ほっとしつつ、シャッターを切る。（カンボジア）

米崎小学校仮設住宅。子どもたちの貴重な遊び場でもある中庭で。一家で暮らす佐藤あかりちゃん、このときは小学校4年生。（陸前高田）

今年の3月、あかりちゃんは小学校を卒業した。これからもこの街で生きていきたい、と決意を語る。

教訓の伝播（でんぱ）

この震災の教訓を埋もれさせないためにはどうしたらいいのかを考えたときに、これからの社会を担っていく高校生たちに、自分たちの目で今のうちに見てもらい、その教訓を自分たちの地元に持ち帰ってもらう「教訓の伝播（でんぱ）」をしていく必要を感じ、3年前からスタディツアーを始めました。実際に参加した高校生の中には、自分で報告会を主催して、防災の大切さを発信する団体を立ち上げている人もいます。そうすると、高校生ががんばっているのであればと、大人も協力するよって輪が広がっていきました。年代を超えた連携も生まれ、学生ならではの良さというのを、学生だけでなく、大人側も発信していくことも大事なのかもしれないです。

情報発信することには復興のカギが隠されている

5年の歳月が流れる中でも、まだまだ人手が必要な場面があるかと思います。
復興の鍵を握るのが、「人がどれぐらい通い続けてくれる町」になるかです。交流人口、ファンを絶やさないことがその1つだと思っています。例えば、1回ボランティアや、旅行で行ったときに、「次は友達誘って行こうか」「まだまだ人手足りないらしいよ」「友達とボランティアに行ってみようかな」って、人が訪れたくなる情報発信をして、街の魅力に触れるきっかけをつくっていくことが大事ではないかと感じます。

自分の足元から人間関係を広めていく

震災以降から、自分の住まいの地域イベントに積極的に参加して、自分の足元の人間関係を広げることに力を入れるようになりました。災害に巻き込まれたときも、あそこに避難すれば、もしかしたら顔見知りの人が来てくれるかもしれない。それだけで大きな安心感になり、まずは身近な人とのつながりを広げること。何かが起こったときに、自分の身を守るのって、最後には人のつながりだってことを恐らく皆さんは、実感されてこられていると思います。これからは、それを自分の暮らす場所から広げることが大事ではないかと思います。

自分の普段の日常に取り入れてみる

いきなり今度東北に行こうよってなると、ちょっとハードルが高いと感じる人も少なくないでしょう。例えば、普段の生活の中で「この前岩手に行ってきたから、今日岩手の名産品持ってきたよ」って。自分たちの日常の延長線上に自然と東北の話題が入ること、日常の中に被災地のことを取り入れてみるということが大切だと感じます。

若い力の情報発信には大きな力がある

現地の活動を見ていると、人に働きかけられる力を学生は持っていて、学生だからこそできることがあると思います。
例えば、陸前高田に来た大学生が地元に帰り、実際に自分自身が指定されている避難所に行ったら、備蓄が全然なかった。じゃあ、それに対して、その学生自身が働き掛けて、「もっと備蓄したほうがいいです」と働きかけた時に、「学生さんたちがそう気づいてくれたのであれば、一緒に考えようか」と、市のほうも動いたそうです。次の年度で予算が新しく付いて、避難所となる場所の環境が改善されたという例もあったと聞きました。学生だからこそ人に受け入れられて、新鮮な提案ができて、耳を傾けてくれる人たちがいる。だからこそ学生の可能性は無限大で、人とつながる人に発信をしていく力を、自分自身が思っている以上に信じても良いのではないかと、思っています。

©Rie Nagata

安田 菜津紀さん プロフィール

1987年神奈川県生まれ。studioAFTER-MODE所属フォトジャーナリスト。16歳のとき、「国境なき子どもたち」友情レポーターとしてカンボジアで貧困にさらされる子どもたちを取材。現在、カンボジアを中心に、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。上智大学卒。

やるときは、やるのが、学生です！

データでみる学生の災害ボランティア活動

学生のボランティアについて、皆さんはどのようなイメージを持っていますか？ ここでは、様々なデータをもとに、どれだけの学生が活動をしているのかということをご紹介します。

《ナビゲーター》
ACIプロジェクト（法政大学）

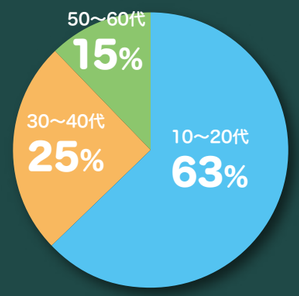
人間環境学部3年
内山 昇太郎

文学部3年
野田 咲希子

学生の災害ボランティアはここから始まった！

阪神・淡路大震災におけるボランティアの実態調査（参考：阪神・淡路ボランティア活動調査委員会）

年齢（H7.4.1 現在）



10代と20代で63%になる。

職業BEST3

生徒・学生	44.1%
会社員	20.1%
主婦	11.1%

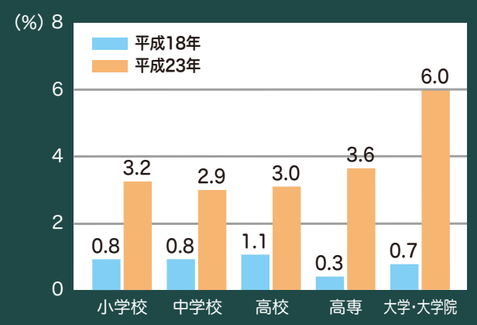
生徒・学生の中の内訳は大学生が53.7%、
高校生が29.6%と大学生と高校生の割合が高い。

災害ボランティア活動を行った学生の数

（参考：統計トピックスNo.67 災害ボランティア活動の状況（総務省））

学生の種類別災害ボランティア活動の行動者率

（平成18年・23年）※行動者率：災害ボランティア活動を行った人割合



東日本大震災で
活動者が大幅に増えた
ことがわかるね！

千代田区内の大学生も災害ボランティアに参加
～東日本大震災編～

千代田区内の大学編

○大学主催の被災地でのボランティア活動の参加者数
3,097名以上（H23～27年度）（調査：専修大学、法政大学、上智大学）

○（上記以外に）募金活動をした学生
約160名（H23.3.26及び4.4～22実施）（調査：明治大学）

○Gakuvo実施の復興支援活動に参加した全国の学生
9,286名（2016年3月末時点）（Gakuvo 日本財団学生ボランティアセンター）

ちよだボランティアセンター編

被災地ツアーは **9回** 実施 し、
224名 の学生が参加しました！

（参加大学：専修、上智、明治、法政、二松学舎、共立女子、日本、大妻、東京家政学院）

被災された方々の笑顔と元気を取り戻すために

～大学生被災地支援・交流ツアー報告～

ちよだボランティアセンターでは、東日本大震災の発災後、区内在住、在学の大学生を公募し、毎年夏に岩手県大槌町等へのツアーを実施しています。

被災地支援ワークショップ

大槌町復興支援隊　吉野和也さんに「東京に戻ってからできること」をテーマにしたワークショップを実施していただきました。

地元NPOでボランティア活動

NPO法人吉里吉里国で薪割りのボランティア活動をし、震災がきっかけとなったNPO設立の話や復興への想いについてお話を伺いました。

語り部ガイドの方のお話

NPO法人おらが大槌夢広場の語り部ガイドの方より、震災前の大槌町の模型を見ながらお話を伺いました。

被災地支援・交流ツアーに参加した学生の声

上智大学2年／高橋 宏美さん

「約5年経っても復興はこれだけしか進んでいないんだ。」と被災地を見たときに感じました。一番印象にのこっていることは、漁師さんという強そうなイメージの方が、涙ぐみながら、「国に支援の申請を出す時もとても厚い資料が必要なんだよ。」と話してくれたことです。「もう少し被災者の方に負担をかけないような仕組みがあれば」と思ったと同時に、東京でも自分にできることをしていきたいと強く思いました。

明治大学2年／関 優香里さん

現地の方が「あなたが想像する大切な人は誰ですか?」と身近な人の大切さについて語ってくれました。今までの人生の中で考えたことがなかったので、現地の方の感情がすごく伝わってきて、あらためて「震災の恐さ」を感じました。現地の様々な人達との交流や繰り返し行われたワークショップを通して、「一人でやれることは少ないけど、みんなでつながって協力すれば被災地に色々なことが出来る」と感じました。

このツアーに参加した学生がChiyoda Student Volunteers（CSV）を結成

2011年8月、9月のツアーに参加した学生で災害ボランティアサークルを立ち上げました。「実際に被災地に行った自分たちが行動を起こさなければならない」という想いのもとで、被災地支援と千代田区の防災活動を継続しています。被災された方々の笑顔と元気を取り戻すこと、みんなで楽しくボランティア「Enjoy Volunteer!」をできるようにしていきます。

学生の座談会へ

CSV（Chiyoda Student Volunteers）座談会

千代田区でボランティア活動をしている大学生に聞きました！

「なぜ、あなたはボランティア活動をしているの？」

CSV（Chiyoda Student Volunteers）は千代田区を拠点とした災害ボランティアサークルで、区内の大学生が所属しています。被災地支援・交流ツアーに参加した5人が被災地でのことやボランティアについて語り合いました。

共立女子大学国際学部2年
佐藤 泉未

専修大学文学部2年
大川内 健人

法政大学文学部3年
CSV代表　菊川 淳

明治大学文学部3年
伊豆 閑

共立女子大学文芸学部2年
石鍋 優花

どうしてCSVに入ったの？

菊川

西日本出身で東日本大震災は遠い場所のことだと思っていました。大学に入るときに一度は、現状を見てみたいと思って見つけたのがこのサークル。新歓のサークル特集をみて入ったよ。

大川内

僕も西日本、佐賀出身。高校のときから個人的に被災地支援活動をやっていました。大学の掲示板で「被災地支援交流」を見たことをきっかけにツアーに参加してみようと思いました。CSVのことは知らなかったけど、ツアーの運営をしている人たちと一緒に活動をしたら、今後も被災地と関わりを持つことができると思い、CSVに入りました。

伊豆

私は大学2年までサークルに入っていなくて、大学2年の夏休みにツアーの存在を知ったことがきっかけかな。被災地に１回も行ったことがなかったので現状を見てみたいと思って参加を決めたんだよね。ツアーでは運営側のCSVのメンバーが積極的に動いていることがすてきだと思った。私も被災地ツアーの運営をして積極的に関わりたいと思って「自分もやってみたい」と思うようになったよ。

佐藤

私は、ツアーで入ったのではなく、大学の災害ボランティア養成講座でCSVのメンバーから話を聞いて、いいなと思って入りました。元々大学で国際関係学を学んでいて、ボランティアや開発援助など、困っている人を助けることに興味がありました。

大槌に向かうバスの中

石鍋

私はその講座には参加していませんでしたが、佐藤さんからの誘いがあり、一緒に入ることになりました。メディア関係の学部ということもあり、テレビ関係の授業を受けることが多いのですが、テレビで見る被災地の状況と現状が結構違うということを聞いたので、現地に行って見てきたいと思いました。

被災地で印象に残ったこと、戻ってきて印象に残った活動

大川内

今回ツアーが、台風と重なり避難勧告がでて体育館で一夜を過ごすことになったことです。避難したとき、緊急事態では自分もどうしたらいいかわからないし、ツアーのメンバーも運営するCSVもわかりませんでした。非常食があるから提供しよう、自分から動こうなど、今後の意識づくりにつながりました。

石鍋

私はツアーから戻ってきて千代田区の防災訓練に参加した際、私たちがもし学校にいて被災した場合、帰宅困難者という扱いになると知り、帰宅困難者がどうすればいいのか考えるようになりました。

佐藤

被災地は、元通りとはいいがたい光景が広がっていました。その光景を見てまだまだできることはあるし、東京でもできることがあると思いました。物販をしてお金を被災地に届けることは団体だからできることです。物販は顔は見えないけど、「つながり」がある。そのような活動をしていきたいです。

伊豆

ツアーに行って心に残っていることは、『ボランティアに来る人のことをまちの人がみんな嬉しいと思っているわけではない』と現地の方から言われたこと。最初、ボランティアは自己満足と思っていたけど、被災地の人のことを考えて活動をすることが大切だとあらためて感じることができたよ。

❶岩手県立大学ボランティアセンターのみなさん
❷千代田区防災訓練の様子
❸❹CSVのミーティング
❺大槌町でのボランティア活動
❻被災地支援・交流ツアーでの一コマ

CSVは普段どんな活動をしているの？

菊川

震災の関係で千代田区に避難している子どもたちの学習支援をしています。

伊豆

学習支援と言っているけど、勉強をしない日もあるよ。今日はやりたくないという日は悩み相談を聞く時間になって、めっちゃ勉強したい日はすごい勉強の時間にあてているの。相手の子どもたちの状況によるよね。みんなはいってみたい？

石鍋

・・・。

大川内

何年生くらいなんですか？

菊川

中学生。
恋愛の話とか友達の話もするよ。子どもが人見知りをしないからすぐ仲良くなれる。活動には2人組で行くから、勉強面でわからないところがあっても安心だよ。

大川内

家庭教師というよりは、
フラットな感じなんですね。

伊豆

どう？
行きたくなった？

石鍋

子どもとどういう風に接したら良いのかわからないし、勉強を教えられるのか不安を感じていたけど、参加してみようかな。

なぜボランティアに興味を持ったのですか？

石鍋

私は友人に誘われてついていこうと思って入った。そういう感じもありなのかな。入っても防災だけでなく多世代交流事業にも参加して、楽しみを見つけられました。とりあえず入ってみよう！という感じでもいいのかなと。自分では思いつかない体験ができるところが良いです。

大川内

ボランティアがしたいというよりも、友達を作りたい！ということが根本にあります。友達っていうか仲間っていうのかな。世代はいろいろあると思うけど、ボランティアをやって子どもやお年寄りとも交流ができる。一緒にがんばる仲間がほしいです。仲間づくりのためにCSVに入ったら、本当に良い仲間が増えました。

ボランティア活動への一歩を踏み出すためには？

菊川

1回やってみる。そこが難しいのかもしれないね。自分は興味があったから、参加しているけど、防災の活動って、見た目おもしろくないのかな。ちょっと硬いイメージがあるよね。

――実際はどう？

すごく楽しい♪♪ (^^)

佐藤

自分の暮らしている地域なのに知らないことがいっぱいあります。どこに避難所があってどこに備蓄があるのかは今まで知りませんでした。知っておかなきゃいけないことをどんどん知れて私は楽しいです。

石鍋

私もCSVがきっかけで、自分の住んでいる地域がどんな防災をやっているのかを調べました。母親も、「こういうのがあるよ。」と区の防災マップを渡してくれました。自分の住んでいる区でもこんなことをやっていたんだと気づくことができました。

大川内

一歩踏み出したい人が踏み出しにくい理由は、おそらくコミュニティに属していないからだと思います。一人で行動できる人はできるかもしれませんが、CSVというサークルの活動としてできること、コミュニティに属しているからできることがたくさんあります。

CSVの魅力は？

伊豆

それぞれ興味がある分野がちがいます。元々は、学習支援に興味があってサークルに入りましたが、サークルに入ることで、被災地や防災にも興味をもつことができました。「たのしいイベントをやりたい」「子どもとかかわりたい」「被災地支援をしたい」。みんなの希望がつまっているところが魅力です！

石鍋

だから自分のやりたい企画を提案してやることも可能です。この前も2年生がやりたいといったことが新イベントになりました。新イベントは、「非常食つくってみんなでたべよう。」という内容。防災マップに、千代田区のよく行く「防災や災害時の施設や設備」を知ってもらう。自分が通っている大学の地域を知ろうという目的です。他のボランティアサークルからも、ボランティアをしたことがない人も、ツアーにいったことがある人もない人もみんなに来てほしいです！！

CSVに興味をもってくれた人は、10ページを見てね！

CSVの活動内容は次のページへ

CSV(Chiyoda Student Volunteers)って どんな活動をしているの?

CSVはイベントの他にも、定期的にミーティングを行なっています。
CSVの活動に興味を持った方、災害ボランティアをやってみたい!
と思った方は、ぜひ、お気軽にCSVまでご連絡ください♪
E-mail : csv.enjoyvol@gmail.com

被災地支援・交流ツアー

毎年夏休みにちよだボランティアセンターが主催する、岩手県大槌町への被災地支援・交流ツアーの協力をしています。

内容
- ○岩手県大槌町へのツアー（町内約10か所をめぐります）
- ○現地の人と交流し、お話を伺う
- ○ツアー参加者とのグループワーク

今から被災地を知るということは遅くないです。実際に現地に行き、現地を自分の目で見て、お話を聞くだけでも現地の人にとっても私たちにとっても「何か」を得られる貴重な体験になります。
CSVはツアー後の、「何か」を見つける手助けもしています。一緒にいろんな活動をして探していきましょう!

福祉まつり

千代田区の福祉まつりでは被災地復興応援ブースに参加しています。

内容
- ○大槌町から直接仕入れた雑貨や食べ物を販売

福祉まつりでは「このお菓子知っているわ。おいしいわよね」という声を多くいただきました。また大槌町出身の方から「私の好きな大槌町のお菓子を売ってくれてありがとう」と感謝の声もいただきました。CSVとしては大きいイベントです。ぜひ一緒におまつりに参加しませんか?

場所によって内容が変わるため、CSVが実施した防災訓練の共有もしています。このような訓練に大学生が参加する機会は滅多にありません。参加することで自分の防災への意識が高まり、考えて行動できるようになりました。

防災訓練

千代田区では年に10回程度、各避難所で防災訓練が行われています。CSVも災害ボランティアとして参加し、活動しています。

内容
- ○千代田区民の方と避難所防災訓練
- ○各種訓練の手伝い
- ○休憩スペースの運営

防災ボランティア養成講座

大学にて防災ボランティア講座が行われる際に、CSVの活動紹介を行い、一緒に活動するメンバーを募集しています。

内容
- ○CSVの活動紹介
- ○ボランティア活動紹介

私自身、ボランティア養成講座でCSVのプレゼンを聞いて、「自分もやってみたい」と思い入りました。ちよだボランティアセンターと連携しているので、安心して入ることができました。

炊き出し訓練

新企画準備中!

内容
- ○湯沸かし訓練　○非常食の作り方講座
- ○区内の災害予備知識!

震災が起こり、学生が出来ることの一つが食事提供のお手伝い。実際に震災が起こってから初めてするのと、一度経験があるのでは全然違いますよね!このイベントはまだまだ企画段階です。興味がある方はぜひ一緒にこの新企画を成功させてみませんか?

学習支援

東北から、東京に避難している子どもたちに勉強を教えています。

内容
- ○子どもの学習の補助（中学生）

学生である私たちが子どもたちの勉強や交流を通して災害について考えるとてもいい機会になります。